

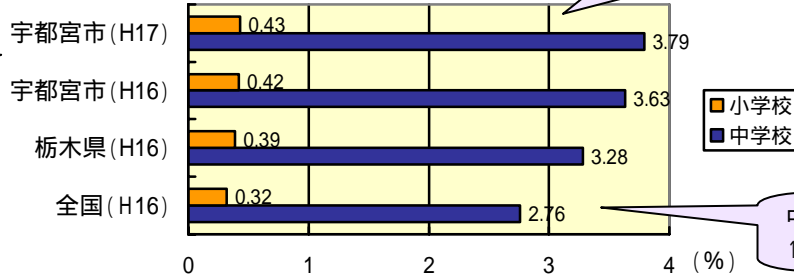
なくそう！ “もったいない型”の不登校

平成17年度「本市 不登校に関する実態調査」結果報告(1)

本市の不登校の状況(県・全国との比較) 病気等を除く年間30日以上欠席の児童生徒

H17を人数で見ると 小学生108人
中学生449人(ただし未確定値)

多少の増減はありますが、本市ではここ数年ほぼ横ばいの状況が続いています。

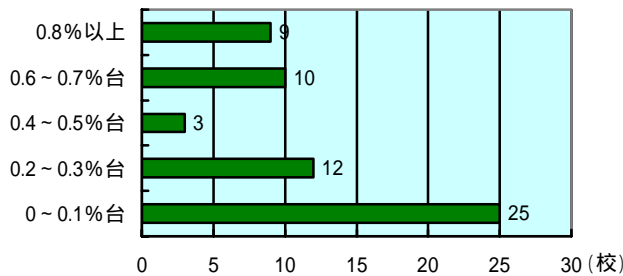


近日、全国の中核都市の状況について調査する予定です。結果がまとまり次第報告します。

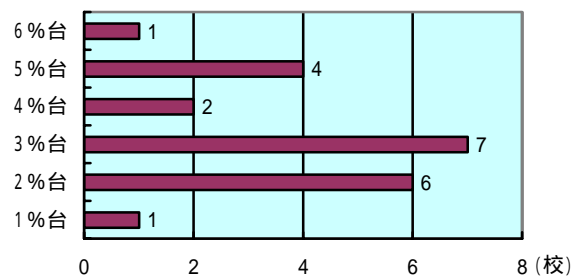
中学校では、全国平均を約1ポイント上回っています。

不登校児童生徒の割合と学校数

小学校(全59校)



中学校(全21校)



平成17年度の不登校のうち、年度内にほぼ登校できるようになった子は、小学生108人中15人(14%)、中学生449人中55人(12%)に留まっています。他にも、適応支援教室に通級するなどしながら、部分的に登校できるようになった子はいますが、学校への復帰はそう簡単なものではありません。

子どもにとって学校は、本来楽しいところであり、学校生活を送ることは“なりたい自分になること”すなわち自己実現への近道でもあるはずですが、現実には、様々な背景により不登校となる子は現れるわけですが、「あとき、もっと丁寧に対応していれば、不登校にならずに済んだのでは」と思われるような、いわば“もったいない型”の不登校は、何としても食い止めなければなりません。

そこで

表情や行動がちょっと気になる子について、教育相談部会等で話題にし、対応を協議します。

担任や学年内だけで処理しようとせず、その子にかわりのある他学年の教師や養護教諭、SC・心の教室相談員など、学年を超えた連携が大切です。

欠席した子に対するアンテナを高くして、支援の時機を逃さず対応します。

- 理由があいまいな欠席が見られたときは要注意。とくに書面や電話の伝言による欠席連絡の場合には、その日のうちに必ず保護者に連絡をとり、様子を確認めます。
- そのような欠席が2日続いたときには、家庭訪問が欠かせません。この時点でアクションが何もないと、子どもは、先生が自分に対して関心がないと受け止めます。
- 腹痛や頭痛といった一般的な症状で、ひと月に3日休むことは、よほどの疾患やけがでもない限り、通常は考えにくいものです。子どもの心の中に「学校がづらい」「つまらない」「行きたくない」などの登校回避感情が背後にあると見ます。

POINT

子どもの心の危機を複数の目で鋭く感知

素早い対応で子どもとの関係を強化

学級・学年の枠にとらわれず柔軟に対応